

光照院たより

発行：(宗) 光照院
発行日：平成29年10月6日
台東区清川1-8-11
TEL. 03-3872-8487
FAX. 03-3875-5485

お袖をつかんで第九歩

善き縁に親しむ

光照院副住職 吉水岳彦

貧苦との出遇い

社会的に弱い立場の人々の支縁活動に関わるようになって、まもなく十年になります。二〇〇七年の末に生活困窮者支援を行うNPOから「貧しい人たちのためのお墓がほしい」との相談を受け、「いったいどのようなものを作ったらいいいのか」、「そもそも生活に困窮するホームレス状態の方々がお墓を欲しているのか?」という自分の疑問を解決すべく、まず炊き出しの行われている現場に行っただけで

はじめて参加したのが、役所の閉まっている期間に行われていた新宿中央公園の「越冬」と呼ばれる活動でした。わたしは一月二日の夕方六時の炊き出し準備を手伝い、新宿周辺の夜回りに参加し、翌朝九時まで夜通し開いている医療テントでお手伝いをいたしました。夕方、暗くなった公園に向かうと、わたしの到着と同時に救急車が停まりました。すると、公園の中央にあるテントから数人のスタッフと車イスに乗せられたおじさんがでてきました。スタッフから「ちよ

うどよかった!一緒に救急車に乗ってください」と、到着早々に救急車に乗って病院へ向かうことになったのです。何がなんだかわからぬまま救急車に乗ると、一緒に乗ったボランティアの看護師さんが「路上に生活する方は救急車に乗っても搬送先の病院が決まらないことが



苦者に向き合うやすらぎ地藏尊

多いから、しばらく待ちましようね」と声をかけてくれました。救急車に乗ればすぐに病院へ行って助けてもらえるものと安易に考えていましたが、そうではない事実を初めて知りました。救急隊員たちは一生懸命病院を探してください。これだけ真剣に対応してくださいならわたしたちの付き添いはいらないのでないかと思っていると、看護師さんから「救急車で



改築当初のこども極楽堂。この後、シロアリ被害のために幾本もの柱を取りかえることになった。

病院へ行くことができても、ちゃんとした診療をしてもらえるかどうかを確認し、遠くの病院から元いた場所へ戻ってこられるようにしていくのが大切なんです」と教えられました。

病院から看護師さんとおじさんと一緒に公

園に戻ってきた後も、疥癬かいせんという皮膚の病気で歩くのが困難な方や、風邪や熱で具合の悪い方々など、この日はさまざまな人が医療テントに運び込まれました。そして、新宿の路上で複数の男性に理由もなく暴行されて連れてこられ

た男性を見た時には、どうしようもなく悲しい気持ちになりました。その男性は血と泥で

全身赤黒あかくろくなり、服などもボロボロで、本当にボロ雑巾のようになっていました。彼を目にした時には、これが現実なのかと自分の目を疑うほどでした。これほど苦しい思いをしている人が同じ国の同じ地域にたくさんいるのに、目の前にいても何もできない自分に強いもどかしさを感じたのでした。

しかし、現場はそんな悠長ゆうちょうに見てもいられません。適切な処置を行うボランティアの医師や看護師たちの姿を横目に、医療テントで寝ている方々のトイレに行く介助を行ったり、お水を汲んで湯を沸かすなどのできるだけのお手伝いをして一晩をそこで過ごしたのでした。

一日お手伝いを終えたときには、最初にNP Oの方から相談された際に抱いた疑問など吹き飛んでいました。医師や看護師の素晴らしい働き、深い愛情をもって接している姿に感動する一方、苦に遭あう人々の姿を目の前にして何もできない自分に対する圧倒的な無力感が心に残りました。自坊に戻って自分の無知と無力と小ささを如来さまの前で嘆き、念佛申しました。無力であることがこんなにも悲しいことかと、どうすることもできない現実の重さと悲しさに打ちひしがれました。また、どうしてこんなに苦しい思いをしておられる方が多く存在するのか、なぜその状態から抜け出すことができないのか。新たな疑問もどんどん湧わいてきました。

眼を開かされる

法然さまのご法語に、人が苦に喘あえいでいるところに遭であった時には地獄などの苦界に落ちた人の極苦ごくくを思い返し、人の死に遭あう時は無常の理ことわりを思い知り、常に念佛してその心を励まさないとの仰せがございませぬ。

日頃考えもしないことかもしれませんが、この現世の実相じっそうは大切な人との別離べつりや理不尽りふじんな思いに耐え忍び続けねばならない、地獄にも比すべき穢えどくかい土苦界くがいであることを思い知りなさいとのお諭さとしの重みを感じます。路上で生活する人がみな悪人なまだったり、怠なまけ者であるわけではありません。多くの人が

その人としてできる努力はしたものの、病気やケガ、リストラや家族の問題などに苦悩した末

に路上での生活を余儀なくされているのです。その時のわたしには、ただただ如来さまにおすがりし、お念佛申す他に何もできませんでした。

しかし、それだけ強烈な出来事であり、強く感じたことであっても、時間が経つにつれて胸の痛みとともに薄らいでいきました。すっかり目を見開いて向き合うべきことであるのに、忘れようとしている自分がいました。

これではいけない、ちやんと関わりたい。そんな想いから新宿の炊き出しに通うようになり、自分の住む地域で活動をはじめると、いつか返すのでした。いま思い返すと、如来さまに一度しつかりと気持ちを受け

とめてもらえたからこそ、一歩ふみ出す力も湧いて出てきたのかもしれません。

それから毎年、一月二日は新宿の越年越冬に参加して、この時の胸の痛みを心に刻もうと考えています。「常に善き

友に遇いて心を恥しめられよ」という法然さまの言葉のとおり、善き縁に親しむつもりで素晴らしい活動をすると、現実を教えてくださるおじさんたちに出会い、いまも自己のいたらかなさを感じながらたくさんの学びを頂戴しています。

善き縁を得たならば

四年前の正月のことでした。ケガ人や病人は少なかったものの、二十代の若いホームレス状態の青年たちに遭遇しました。一人の青年は、暮れに仕事と家を一度

に無くし、人のいなくなった深夜の新宿駅のなか、体育座りで震えていました。

話してみるとごく普通の礼儀正しい青年です。わたしは「なむあみだぶつ」と心に称えながら医療テントへ連れ帰り、温かい食べ物をお出ししました。彼は寒さで

むくんだ手でスープの入ったカップを受け取ると、言葉もなく食べました。どうしてこんな若くして路上に投げ出されてしまうのでしょうか。胸が締め付けられました。

また、夜中に新宿駅の構内でパンを配っていた時のこと、金髪のホスト風の男性が声をかけてきてくれました。「あの、これ自分で食べようと思って買ったんだけど、使ってもらえませんか」とチョコレートのパンを一つくださいまし

た。仕事の貴賤はないと言いながら、ホストの男性に自分が偏見を持っていたことに気付かされたと同時に、誰しも善き縁があれば何か誰かの喜ぶことをしたいと思っているものなのだと感じました。

彼もまた自分と同じく一生懸命に働くなかで善き縁に親しもうとする人間の一人だったのです。この男性が声をかけてくれたこと、出遇えたご縁をうれしく感じました。

現世の苦を抜き、人を菩薩に変えるような働きは如来さまにしかできません。しかしながら、現実苦の一分を知る善き縁を得たならば、共に悲しみ、共に考え、共に生きるものとしてできる手助けをさせていたかったです。願うようになりませんでした。

そしていよいよ、光照

院裏にはまもなくごども極楽堂」が完成いたします。わたしは工事を見守りながら、あの時に路上で座り込んでいた青年のことを思い出します。「もっと早くに違う形で出遇えていたらもしかして……」と考えたりもします。

見えているようで見えていない子どもたちが抱える悩みや苦しさを、多くの人と共に見つめ、真剣に向き合ってゆく場所にしてゆきます。光照院にご縁のあるみなさまには、今後も変わらぬ応援を賜れば幸いです。これからもよろしくお願い申し上げます。

合掌



募金のお願い

この十月末にいよいよ「こども極楽堂」が完成します。当初の予定では、六五〇万円ほどの予算で行う予定であった耐震改修工事が、台東区の指導による減築工事、シロアリの虫食い被害の影響による外壁工事を余儀なくされたことで、費用は跳ね上がり、一七〇〇万円を超えました。

そのため、基本的には住職や副住職、その他、活動支援者からの寄付金を以て行うつもりでしたが、資金が足りなくなってしまうました。しかし有難いことに、光照院に縁のあるみなさまがご協力くださいました。

お借りして厚く御礼を申し上げます。本当にありがとうございます。ただ残念ながら、建立後の活動のことを考えると、まだ支援金が必要なお状態です。みなさまには引き続き、ご支援を賜れば幸いに存じます。何卒よろしくお願ひ申し上げます。

聡穩基金の開設

「こども極楽堂」建立のために、光照院檀信徒総代であった故 林聡氏のご家族様より、多大なご支援を頂戴いたしました。しかし、これを建設費用に充ててしまつては、せっかくの慈悲の御心を一瞬で消費してしまいます。

そこで光照院では、一時的に「こども極楽堂」建設にこの支援金をお借りするものの、徐々に光照院から返納することで、将来を担う子ども

たちの豊かな育ちに資する、さまざまな支援に用いる基金として用いることにいたしました。その基金の名前は、林聡氏の法名「瑞雲院浄誉篤道聡穩大居士」にちなみ「聡穩基金」としました。基金の支援を受け取る子どもたちが、如来さまの「お聡り」の智慧に学び、慈愛あふれる「穏やか」な人柄に育つことを祈つて運用をさせていただきます。

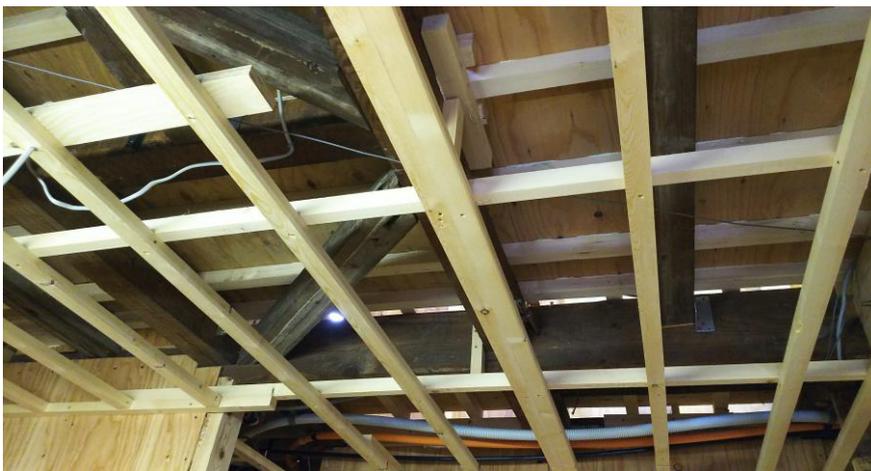
ひとさじの会活動

副住職が代表をつとめる社会的に弱い立場の方々を支縁する「ひとさじの会」の活動は、毎月第一・第三月曜日十五時から光照院にて行われています。もしご興味がありましたら、どうぞ遠慮なくお越しくださいませ。一緒におむすびを作つて、良いご縁を結びましょう。

貧困・震災支援御礼

日頃より、光照院や副住職の行う震災や生活困窮者の支縁にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。多くの檀信徒のみな

さまから多大なご寄付を賜りました。この場をお借りして、心より感謝申し上げます。誠にありがとうございます。みなさま、今後もご協力のほど、何卒よろしくお願ひ申し上げます。



「こども極楽堂」の天井内の写真。新しい材木をふんだんに使用しています。虫食いには本当に困りましたが、結果的に、とてもしっかりとした素材を用いた頑丈な建物になりました。これで大勢の子どもが跳ねてもビクともしません！！

こども極楽堂紹介

○主な活動内容

・無償学習支援「こぼと」

毎週木曜日開催

十六時～十九時

NPO台東区の子育てを支え合うネットワーク(通称「たいとこネット」)が行う無償の学習支援活動。小学生から中学生までの子どもたちの学習を学生ボランティアと共に見守る。この他、料理を一緒に行う食育を通じて、子どもに生きる力を得てもらおう手助けも行う。

・子ども食堂

第四木曜日開催

NPOたいとこネット

トの無償学習支援活動の延長で、食事に事欠く子や孤食の子たち、生活が安定していない親子などに食事を提供し、食と安心を得てもらおう。

・居場所支縁

毎週金曜日開催

十四時半～十八時半

ひとさじの会が行う

子どもの居場所づくり。学校にも自宅にも居場所のない子どもたちが放課後に自由に来、本を読んだり、宿題をしたり、安心してぼんやりできる場所を提供する。

お佛具料ご寄進

爲 常誓院行誉豊岸居士三十三回忌追善菩提
一金 壹拾萬圓 施主 後藤幸子殿

光昭念佛会ご案内

光昭院では、毎月お念佛とお写経を行う会を行っております。開催日は、基本的には毎月第三土曜日の十五時から二時間を予定しています。みなさまのお越しをお待ちしております。

〈念佛会の流れ〉

- 十五時 茶話会
- 十五時半 法話
- 十六時 写経
- 十六時半 念佛回向
- 十七時半 終了

十夜放生会ご案内

《日程》

十月二十九日(日)

《御齋(昼食)》

十一時三十分から

《法話》

十二時十五分から

《法要》

十三時十五分

※法要の出欠と塔婆の申込、ご参詣の人数を同封のハガキにて必ずお知らせください。

光昭院行事予定

《月例行事》

・第三の土曜日

光昭念佛会

・第一と第三の月曜日

ひとさじの会

《年中行事等》

平成二十九年

・十月二十九日(日)

十夜放生会法要

平成三十年

・一月一日(月)

正月修正会

・一月十八日(木)

初観音

・三月十八～二十四日

春のお彼岸

・三月十一日(日)

被災地域追悼法要

・四月八日(日)

花まつり(降誕会)

・六月十日(日)

施餓鬼会法要

・七月十二～十五日

お盆(新暦)

・八月十二～十六日

お盆(旧暦)

・九月二～二十七日

秋のお彼岸

・十一月十一日(日)

十夜放生会法要

※これはあくまでも予定です。何らかの理由で変更することもあります。ご了承ください。

新刊紹介

平岡聡著

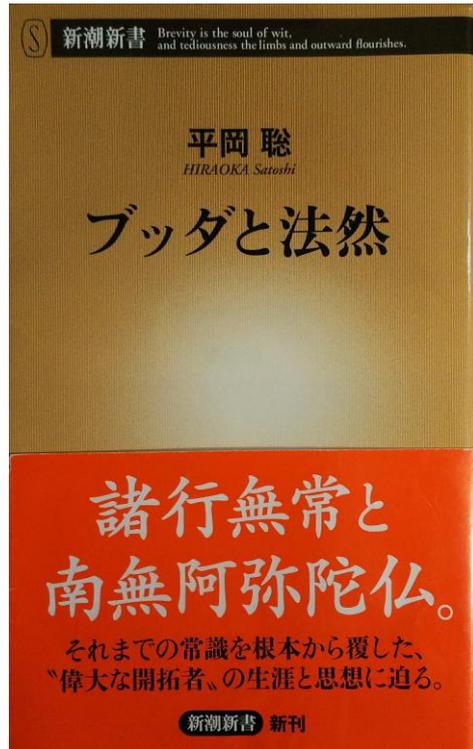
『ブツダと法然』

著者の平岡聡氏は京都文教大学学長であり、仏伝や仏教の業報説話、大乘經典起源説等の研究者です。とはいえ、本書は難しい研究書ではありません。

本書は平岡氏が、浄土宗総本山知恩院の月刊誌『知恩』に平成二六年四月から二年間連載したエッセイを加筆訂正したもので、ブツダと法然さまという偉大な宗

教家の生涯の比較を通じて、両者の特徴を浮き彫りにしています。加えて、本書には「それぞれの生涯・思想・歴史」と題する付録があり、仏教に触れたことのない人でも、ブツダから法然さまに至る仏教の概要や歴史的發展を知ることができます。平易な言葉で丁寧の説明されていて、これから仏教を学ぶ人に最適な良書です。

◇新潮新書二〇一六年九月二〇日発行／二三六頁／七六〇円十税。

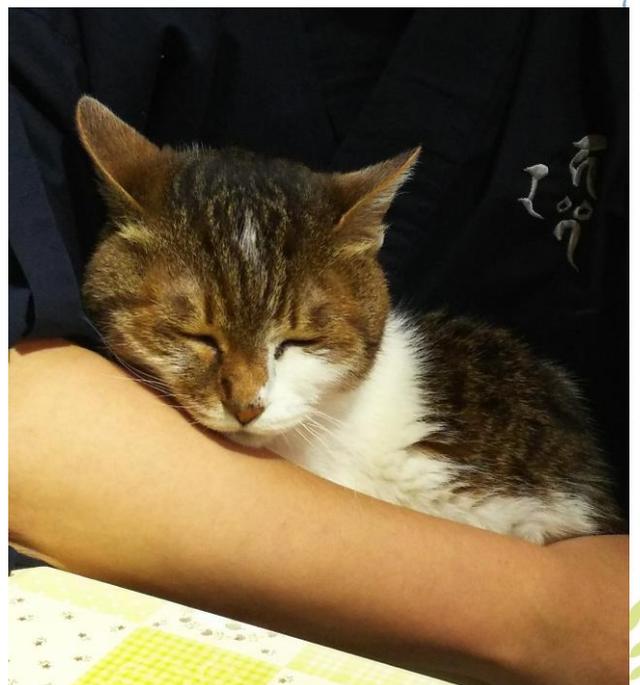


光照院へのアクセス

台東区循環バス「北めぐりん」「浅草駅」から乗車し、光照院そばの九番「清川一丁目」停留所で降車ください。また、「甲42南千住車庫ゆき」バスご利用の場合は、「浅草松屋前」停留所から乗車し、「東浅草」停留所で降車ください。

編集後記

以前、ボランティアに参加してくれていた元暴走族の青年が、幼い時に体験した孤独と虐待の話をしてくれました。「なんで俺だけが、こんな目に遭わなきゃならねえんだよ！」と、ひどく自分の生を恨んだという彼の言葉は、今も耳に残っています。たった一人でもいい、「こども極楽堂」を、そんな子の安心できる居場所にしてゆきます。(副)



てらねこ沙羅の一句

肌寒い

秋の夕べは

腕まくら

お月見よりも

お刺身の夢

秋鮭、秋鯖、生ガツオー

てらねこ 沙羅拝